

浮きあがる自然の紋様

夕陽に映える、

有明の海。



漫遊記

おこしきかいがん
御輿来海岸の
夕暮れ

間もなく夜の帳がおりる。西の空に沈もうとする太陽に別れを惜しむかのように美しい砂の紋様が語りかける。

往古、景行天皇が九州遠征の際、御輿を着けられたという、ここ宇土市

御輿来海岸。県立自然公園、郷土修景美化地区に指定され、干潮時の自然の縞模様の干潟と堆積岩の板状の岩石は他に類をみない。

夕日にシルエットをおとす湯島。天草島原の乱で農民軍が寄り合って軍議を開いたことから、別名、談合島とも呼ばれている。海面を染める夕日の光は、天草四郎殉教の幾方の涙であろうか、静寂とした絵巻きの一ページにも時のドラマが描かれている。



撮影 神原陽一さん